

会 議 録				
令和 7 年度第 2 回 生活支援事業協議体		日 時	令和 7 年 9 月 3 0 日（火） 1 4 時 0 0 分～1 6 時 0 0 分	場 所 小金井市役所第 2 庁舎 8 階 8 0 1 会 議室
事務局		小金井市福祉保健部介護福祉課		
出席者	委 員	高良委員長（法政大学） 田部井委員（社会福祉協議会） 清水委員（介護事業者連絡会） 鈴木委員（民生委員児童委員協議会） 千田委員（地域活動代表者） 刃田委員（地域活動代表者） 鈴木委員（町会・自治会） 第 2 層コーディネーター 松村氏（小金井きた地域包括支援センター） 中島氏（小金井ひがし地域包括支援センター） 河合氏（小金井みなみ地域包括支援センター） 久野氏（小金井にし地域包括支援センター）		
	事務局	第 1 層コーディネーター 菊地原氏（小金井市 介護福祉課） 木津氏（介護福祉課）		
傍聴の可否		◎可 ・ 一部不可 ・ 不可	傍聴者数	0 人
傍聴不可・一部不可の場合の理由				
次 第				
1 開会				
2 (1) 報告事項				
① 事業の進捗状況〔資料 1〕				
② 令和 7 年度第 1 回から第 4 回生活支援連絡会報告〔資料 2〕				
③ 生活支援コーディネーター活動・会議報告（4 月分～7 月分）〔資料 3〕				
④ 令和 7 年度各地域包括支援センター活動報告				
(2) 検討事項				
地域課題について〔資料 4〕				
3 その他				
次回協議体の開催予定				
4 閉会				
1 開会				
2 議題				
(1) 報告事項				
① 事業の進捗状況について				
事務局より資料 1 を基に説明。				
シニアのための生活に役立つスマホ活用講座の年 3 回実施するところの 1 回目が終了した、スマホちょこっと相談室も随時開催しており、参加者人数は資料 1 のとおり、スマホサポーター養成講座も今年度開催し、1 2 名のスマホサポーターが誕生し				

た。

次にプレシニア・シニアのための地域参加講座として地域デビュー講演会を6月13日(金)に開催し、地域デビューに挑戦した体験談や活動について外部講師を呼び、講演会を実施した。次回第2弾としてこの秋のお元気サミット・介護未来フェスの生活支援事業の中で、6月13日に講演した外部講師を呼び、地域デビューの体験談と企画・実行した際の話講演いただく予定。

②令和7年度第1回から第4回生活支援連絡会報告〔資料2〕及び③生活支援コーディネーター活動・会議報告(4月分～7月分)〔資料3〕について

資料を基に事務局より説明後、活動報告の内容を踏まえて、第2層生活支援コーディネーターがこのような素晴らしい活動をしていることをもっと地域住民に周知してほしい。地域にこのような支援を求めている団体関係者はもっといと思うので伴走支援してほしいとの意見あり。

④ 令和7年度各地域包括支援センター活動報告について

それぞれの第2層生活支援コーディネーターから活動報告を頂きたい。

まずはきた包括からお願いしたい。

(松村委員)

昨年度に桜町自治会防災会との共催で、きた包括防災講座を3回開催したが、その際、講座運営を手伝ってくれたボランティアを中心に新たなチームが誕生。「ぼうさいCafeさくら」という新しい活動が桜町1丁目のカフェを拠点として始まった。2ヶ月に1回、あえて曜日、時間帯を固定せずに開催しており、金曜の夜に開催した際は現役世代の方の参加が大半を占めた。これまで災害時のスマホ活用や、水害への備えといったテーマを取り上げており、次回10月は災害弱者と言われる外国人、障害者、認知症の高齢者にも分かりやすい「やさしい日本語」を取り上げる予定。この「ぼうさいCafeさくら」は、きた包括防災講座よりも少人数でクローズな場として気軽に情報交換ができ、互いにより深く知り合うことが出来る場なので、そこからまた新たな活動が生まれるとよいと考えている。

また、この活動が生まれるきっかけになった「きた包括防災講座」は、今年度、地域安全課との共催で、11月と3月の年2回の開催を予定。現在11月の講座の準備を進めている。昨年度のアンケートで多く出た市の被害想定や備蓄、市民への正しい情報提供のあり方についての話をする予定。また、日頃から市と月1回程度防災無線を使用しての情報、伝達訓練を実施している地域の自治会防災会の方々にも参加いただこうと考えている。

その他の啓発活動について。さくら体操担当者と情報共有しながらリハビリ職巡回事業の活用を進めている。主にさくら体操自主グループ以外のリハビリ職の派遣について、各団体から細かくニーズを聞き取り、リハビリ職と打ち合わせを重ね、できるだけオーダーメイドの講座を提供するようにしている。

認知症支援推進とも連携した取り組みを実施。今年度は、認知症になった後に自宅で過ごすための介護保険サービスの活用をテーマにして、地域の学習会の場で講座を開催する予定。この講座では包括の認知症支援推進の看護師が認知症の基本知識、介護保険、市独自の制度の紹介を説明し、在宅サービスの利用の実情についてWLIF訪問看護センターという事業所の認知症ケア指導管理士という資格を持つ看護師に依頼する。

この訪問看護センターは市内ではかなり大規模の事業所で、週1回勉強会を開催するほか、学会にも積極的に参加して職員研修に大変力を入れているので、今回のきた包括からの依頼に対しても、無償でのお願いにもかかわらず職員の学びの機会になると快く受けてくれた。

もともとこの講座は、北多摩医療生協主催のリラの会という団体より、認知症になった後の不安にこたえるテーマで認知症講座をお願いしたいという相談をきっかけに、主催者と内容を検討する中でうまれた企画だった。相談を重ねる中で、「認知症の予防」や「認知症の方との関わり方」といった講座は多いが、認知症になった後に、在宅で、どんな介護保険サービスを活用して生活できるのかといった内容の啓発は、あまりして来なかったことに気がついた。

きた圏域には他にも長く活動を継続している学習会があるので、そうした団体にも同様の講座の開催を提案して、認知症になっても尊厳を保持しつつ、地域で希望を持って暮らすことができることを伝えていきたい。

(委員長) 報告いただいた内容について質問や意見はよろしいか？

(鈴木(幸)委員)

最近では認知症になったら病院ではなく、自宅での生活を重視するようになったと聞いたことがあるが、まだそんな感じではないのか。

(松村委員)

そこを目指して地域包括ケアシステムの構築に向かって市を中心に関係者も努力している。また、実際自宅で生活している方もたくさんいる。

また、そうした勉強会に長く参加している方が年齢を重ねていき、昔は予防を学んでいたが徐々に自分事として不安になってきたのだと思う。

今のシニア世代の方は核家族化が進んだ世代でもあり、皆が皆、介護経験があるわけではない。そのため、自分のもうちょっと先のことに不安を抱いているという印象を受けた。

自分が当事者にならないと、どんな介護保険サービスを活用して在宅で生活していけるのか分からないと思う。個人情報のあることもあり、近所の当事者の様子もなかなか聞けない。今後認知症になっても、在宅で介護保険サービスをこんなふうに活用できるなど、ポイントを周知することで安心してもらえると思う。

(委員長) 他に質問はないか。

(千田委員) 改めてすごく活動していると感じた。その中で防災講座について伺うが、活動団体ときた包括とは特定の協力関係を持ち開催してるのか。

(松村委員)

きた包括はその活動団体のサポーターの立場だと考えている。今は完全にその活動が独立してサポート抜きでも活動を継続できる一歩手前の段階。包括はそろそろ次のことを話しませんかとか、ちょっと反省会をやりましょうか、などの声掛けをする、ワークショップで言えばファシリテーター的な存在になる。

(千田委員)

要するに立ち上げ支援したのがきた包括ということか。

(松村委員)

講座を担当した防災士から、講座だけでは参加者と話が盛り上がりつつも、その方の連絡先を聞けず、その場限りで今後に繋がっていかない、もっと小さな会場でもっと

密に話をする機会を設ければ、その人たちと長く繋がっていけないのではないかという提案があった。活動の拠点となる会場の剪定には包括が動いたが、提案自体は活動に参加されている方々から上がったもの。

（委員長）

まさにこの質問はこの後の議論に繋がる。住民の方が興味を持って何かしようとした時に場所を探すのが大変とか、何かの困難が立ち向かうことがある。その時に少しサポートをすることで当事者である住民の方々が主体になりながら活動が続けることや、もしくは団体を立ち上げることができる。

その方法の一つとして第2層協議体をうまく活用しながら、それだけで終わらせずに実際の活動に繋げているので、まさに生活支援コーディネーターの役割を果たしている。

きたの圏域ではずっと防災関係の活動をしていて、そういう中で地域の資源をよく分かったうえで、その資源をうまく活用できている。

基本だが本当に大切だと思うのは、人数を把握してそれに合わせた支援をしているから、参加者が興味を持って活動出来ていると感じた。

（鈴木（寛）委員）

実際に活動している自治会について、包括の支援は範疇に入らないと思うが。きた圏域の方が何か支援が必要であれば、それを自治会にどう繋いでいくかを考えた方がいいと思うがいかがか。

（松村委員）

シニアが地域で安心して生活できるために、包括は自治会町会の活性化を目指している。今後、避難時要支援者支援事業を実施するうえでも、町会・自治会はその基盤となると考えている。そこで、去年は桜町会の自治会防災会から講師を招き3回講座を開催した。

今年度の防災講座の開催にあたっては、地域安全課だけを招くのではなく、地域安全課と日頃から連携し、毎月のように防災無線を使って訓練している地域の防災会の方々にも参加いただく。そうした取り組みを伝えることが自治会町会の活動支援につながると考えている。自治会町会の総会などに参加させていただいた際、理事の方から、自治会町会に入っていない人達にどのように入会のメリットを伝えたらいいのかわからないというお話をよく伺う。これだけ共助のための基盤作りに取り組んでいるのにそれが伝わらないのは残念だと思う。とはいえ、皆さんお忙しく活動の継続だけで精一杯であり、活動の周知や他の団体と活動内容を共有するといった時間がない。生活支援コーディネーターとしてはそこを代わりに伝えていくのが役割だと考える。そうした考えにより、防災というテーマで自治会町会、防災会等色々な団体と繋がりながら支援をしている。

（委員長）

地域の繋がりが基本だと思う。住んでいる方達が主体になるので、包括支援は行政と繋ぐとか、なにか必要があれば情報を伝えるなどの役割になる。

次はみなみ圏域について活動報告をお願いしたい。

（河合委員）

大きく3つ報告する。

1つ目は、既存の活動団体の運営支援について、昨年度からずっと支援を続けており第2層協議体も開催している、大型マンション内の有志で発足したシニアライフ専

門委員会について、参加者からちょっと運動をしたいという希望があり、市オリジナルのさくら体操を行っている。こちらではDVDを見てできるからということで実施の支援を行った。今のところ3ヶ月に1回ほどの開催だが、参加者からテレビとパソコンの提供があり継続している。

また、集合住宅でのさくら体操の会では参加者からスマホに関することについて教えて欲しいという複数の声があり、2ヶ月に1回スマホサポーターによる出張スマホ相談会を継続的に開催している。ひとまず今年度まで継続が決まっており、そのあとの予定は参加者と一緒に検討していくが、雰囲気がサロンの感じがありスマホのことだけではなく、最近の困りごとの話も色々出てきているので、通いの場としての存続について検討を提案している。

2点目は関係機関との連携について、小金井警察署や消防署、保育園、公民館などの関係機関との連携について。

警察署にいるふれあいポリスという地域と警察をつなぐ役割の方に認知症カフェへの出張講座をお願いしたり、個別の対応になるが詐欺被害にあった地域住民宅へ注意喚起のステッカーを一緒に貼りに行ったりと連携協力いただいた。また小金井消防署の防火防災診断として無料で自宅訪問し災害リスクへのアドバイスをいただく事業に同席した。

また、みなみ包括ニュースへの記事の提供など定期的に繋がりを持ち、地域の方への情報提供だけでなく、消防署と地域住民との架け橋になれるよう意識している。

その他、保育園とのイベント情報の交換や、イベント周知、あと公民館主催の講座の見学など。地域で開催しているイベントに参加して情報収集を行っている。

こうした繋がりの中で地域のちょっと心配な方の相談をいただいたり、シニア世代の方の社会参加につながるようなボランティア情報をいただいたりする。

また、なかなか公に宣伝するのは控えたいが、言ってくれば無料で場所を貸しますよというような、ちょっとした情報が集められる活動をしている。

少しずつだがそういう繋がりを持つことでの情報収集を今後も続けていきたい。

3点目に個別地域ケア会議を開催した。認知症のご夫婦の件で、お店のカートを無断で持ち帰ってしまい、夜中にずっと戻したところを盗まれたと思われてお店の方から警察に通報した事案があった。

そのお店の方は事情を話すのにも、個人情報のことがあるので、その家族や本人に確認してから伝えたいという考えがあった。お店は市境にあり、オーナーはカートを持ち帰った人がどこの市の住民か分からないため、どこに相談したら良いのか分からなかったという事例だった。今後、みなみ圏域は他市と隣接する地域が多いので、どのように他市と連携していくかが課題となっている。

(委員長)

何か質問はあるか。

他市と繋がっているのは当たり前で、どのように他市と連携していくかは今後の課題や論点になると思う。

(千田委員)

シニアライフ専門委員会の活動はスカイコーポラスで開催しているが、そこに包括がお邪魔するのか。

(河合委員)

元々は何人かの住民から活動支援の要望があり、そこに包括が協力に入った経緯が

ある。住民からの希望に対して包括が段取りを手伝いながら立ち上げを一緒にやってきた。いつも活動に呼んでもらい、色々な相談を伺いながら情報提供や支援をしている。

(千田委員) 今後の活動が広がれば、そこのいろんな隠れてる困りごとが分かる感じが。さくら体操やおしゃべりサロンは包括が段取りしているのか。

(河合委員)

おしゃべりサロンは自治会の方が主体で行っている

(委員長)

他に何か質問はあるか。それではひがし圏域の報告をお願いしたい。

(中島委員)

今年度から東小金駅近くでスマホの相談室が新たに立ち上がり、運営に携わる中で既に別の場で活動しているサポーターや、会場のオーナーの繋がりで、開始時には相談者でいっぱいになることもある。相談内容はそれぞれで毎回のように来ている方もいて、通いの場での機能も果たしている。

また、スマホちょこっと相談室での相談待ちの方からいろんな話を伺い、包括の紹介や、他のサロンの紹介する機会になっている。他にフリースペースを解放している方より、高齢者のサロンを開きたいと相談があった。

ご自身での立ち上げは体力的にも難しいということで、サロンを立ち上げたい方とのマッチングが必要となった。また、徒歩圏内の友達作りができることが目標で、昔の商店街の繋がりの代わりとなる活動を目指したいという思いがあった。

そのことについて第二層協議体や、地域福祉コーディネーターや第一層コーディネーターと話し合いの場を設けたりして今後も話し合いの機会を予定している。

昨年度の短期集中予防サービスを受講した方の活動団体立ち上げについて後方支援を続けてきたが、参加者の役割分担がうまく出来てほぼ自主化することができた。参加者の中にサブスタッフの若い方がいることや、他のグループでの活動経験がある方がいたことと、すごく和やかな雰囲気の中で主体の参加者それぞれが積極的に参加していることが、うまくいっている要因だと感じる。

その他、今年も情報発信としてひがし包括の情報誌を作成して、地域デビューガイドやその他の事業案内と共に自治会町内会や医療機関やサロン代表者の方に向けて配布をした。配布する時にそれぞれの関係機関の方に話を伺ったが、自治会町会の存続の難しさについて伺うことがあり、また包括にどう支援してもらうかを考えて相談するとの話があった。

(委員長)

何か質問等あるか。

今年度から生活支援コーディネーターになって、地域の方々と知り合いにならないとどうにもならない中で、最初から活動するのは大変だったと思う。

まず繋がっていくことが、非常に大事だと思うが、そんな中で立ち上げ支援も順調にできているし、そのフリースペースを解放したい方と、活動したい方のマッチングがうまくいき活動が継続できるといいと思う。

それでは最後になし圏域からの報告をお願いしたい。

(久野委員)

2点について報告する。

1 点目はサロンのモニタリングについて、今まで立ち上げ支援をしていたサロンや運営の後方支援をした団体について現状確認をしていた。サロンの主催者が急に亡くなった頃に支援をした団体は、支援していた時は活動の継続がすごく危ぶまれ、参加者の方達もすごく不安な思いをしていた。そこに対しては1年ごとに代表や副代表を決めて運営するようにとアドバイスをし、その後の様子を見に行ったりしていたが、その後は順調に運営が出来ていた。また、新しく音楽サロンを立ち上げた団体は、主催者が他地域に住んでいるため、どうしても場所の確保が難しく、その支援をしてくれる方を見つける方法のアドバイスをした。新しくカーネスト武蔵小金井という新しいJ K Kのマンションができたので、そこの住人自身が地域とつながりたいというニーズを把握し、その方達に向けて新しい音楽作用のサロンを情報提供していくと実際に繋がることのできたので、その団体の現在を確認したいと思った。

あとは新しく出来た国分寺市に近いサロンがすごくアットホームな感じで運営していて、参加者の中にはデイサービスは行きたくないが、ここなら通いたいという高齢者の方も何名かいたので、そのようなサロンが出来て本当に良かったと思った。

2 点目として7月にお金の管理の啓発を行った。

本町長生会の方から夏バテ予防の講座開催についての依頼があり、90分ぐらいの持ち時間をいただいた。講座の前半は夏バテ予防の話を、後半は過去に生活支援事業で作ったお金の管理の啓発DVDを見せてその感想を参加者から伺った。参加者は自信を持っているようで、年は取ったがまだ自分で管理できるとか、いつも肌身離さず貴重品を持ち歩いているとか、家族は信用できないなどの意見が多く、全部自分で管理している方もいたので、少し意識を変えてもらえるといいなあとと思いながら講座を行った。

その中にはノートにまとめている方もいらしたので、その方のお話を聞いてもらい、1人で抱え込んでる方の意識への対策が来たらいいなと思った。

(委員長)

何か質問等あるか。

(千田委員)

J K Kとは何か。

(久野委員)

東京都住宅供給公社の頭文字の略だ。

いままで本町住宅という古い公社の住宅があって、何年か前に一部を壊して特別養護老人ホームを建てて、その横に新しく若い方も入れる供給公社のマンションが出来た。今年の春の3月ぐらいから入居がはじまり、若い方たち向けの部屋や高齢者の方だけの部屋も40戸ある。高齢者向け住居に入居する方達は都内のあちこちから集まっているようで、地域と繋がりたいという意識が高い方が多くいるので、通いの場のマッチングを試みた。

(委員長)

これは、ある意味チャンスだと考える。

ちょうど生活が変わったところだからこそ、地域を知りたいという思いがある。そこをうまく繋げられたことは、必要な役割を果たしたと思う。

(鈴木(幸)委員)

本町住宅は高齢者の方が多いと思うが、本町住宅の通いの場に参加される方は高齢な方が多いのか。

(久野委員)

本町住宅は歴史があり、そこの通いの場に参加されてる方は80代から90代ぐらいの方もいる。参加者は自分で歩いて来られる方で、すごろくや色々懐かしのゲームを行うのを楽しみに来る。少し残念なことは参加者が毎回少ない時が多いので細々と続けている。

(委員長)

他によろしいか。

それでは検討事項に移っていく。地域課題について資料4をご覧ください。

まずはこの資料4について、事務局から説明をお願いしたい。

(事務局)

資料4をもとに事務局から説明する。

前回の振り返りと第9期小金井市介護保険・高齢者保健福祉総合事業計画策定に関する調査等の抜粋資料を踏まえて、本日検討する内容について資料4の右上にまとめた、きっかけさえあれば、活動に参加する人達に対する働きかけについて。

次に、どうサポートすれば現在の活動を継続していけるのか。主にこれは既に活動してる団体向けの課題に対する働きかけになる。

続いて、どうすれば活動の主体となる人材を発掘、育成できるのか担い手に関する働きかけの3つについて検討していきたい。

(委員長)

いまの説明のように、前回の議論を踏まえて環境整備を中心に話をしていく。

第9期小金井市介護保険・高齢者保健福祉総合事業計画策定に関する調査にある居場所として求められる気楽に歩いていける場所や、取り組みや情報提供の部分について、この調査結果からも全て出ている通り量的調査としても根拠として挙げられる。また、この調査は高齢者対象のみではなく、一般の小金井市民を対象としたものなので、こういうことが高齢者に限らずどの世代にも必要だと感じていると分かる。

そういった中でこの協議体では、このような環境整備をすべくいままでも進めてきたが、まだこのような課題がある。

また今回検討する3つについては別々に検討するのは非常に難しい内容だと考える。つまり1番目のきっかけさえあれば、活動に参加する人達にどのように働きかけるかということは、2番のどのようなサポートすれば現在の活動を継続していけるのかにも絡んでくる。逆に3番の人材を発掘することは2番の活動の継続を可能にすることに通じるし、きっかけがあれば参加する人達に対する働きかけは、人材の発掘にもつながるというように全部連動している。

したがってこの3つを論点として検討していければと思う。

まず、1番のきっかけがあれば活動に参加する人達への働きかけるかは、きっかけ作りで、もうすでにいろんなことを行っている。

例えば地域デビュー講演会に参加して、その後に次の活動につながるのかは、その講演会に参加した直後はやる気があっても、家に帰って時間が立つとそのままになってしまう方が多分多い。

また、きっかけ作りとしては実際のアクションや行動につながるように。そして、その行動が継続できるように話し合うことが必要だと思うがいかがか。

日頃いろんな活動をされているので、ヒントになるような意見をいただきたい。

(千田委員)

この秋に宮地楽器ホールの小ホールで行うお元気サミットで第2弾の講演会を行った後に個別相談というブースを作って、シルバー人材センターや民間団体をいくつか個別相談相手として会場に呼び、講演を聞いた後すぐに同じ会場にいる活動団体に相談が出来るイベントはあまりなかったのも、大事なきっかけになると思う。

また、個別相談相手としてどの団体を呼ぶかによるが、そういう取り組みをやってみるのはいいと思う。期待している。

その相談の中で応援ブックや地域デビューガイドをぜひ見てもらい活動のきっかけづくりに役立てたい。

ただ、個別相談が30分間しかないのも、時間が短いけどトライしてみたい。

(委員長)

おっしゃるとおりで、講演を聞いて自分も何か活動したいと思ったら、その講演会の会場に個別相談できる場があって目の前に活動先の方がいて、知り合いになって話が進み、繋がっていくことは大いにある。

お元気サミットで行う地域デビュー講演会の後の個別相談について、事務局から予定を簡単に説明していただきたい。

(事務局)

11月12日・13日の二日間にかけてお元気サミット・介護みらいフェスを開催する。そのイベントの1日目の午後の1時間半の枠を生活支援事業でいただき、初めの1時間に清水氏に講演をしてもらい、その後残りの30分で個別相談会を開催する。個別相談としてはシルバー人材センター、NPO法人シニアSOHO小金井、社協・ボランティアセンター、翁味会と写真会、あと他に声をかけるところが1団体あり、今現在6か7団体が個別相談会に協力いただけるということで調整している。

(委員長)

千田委員がおっしゃるとおり、確かに個別相談の時間配分が30分とは難しい。本当はもっと時間が欲しいが、お元気サミットが全体であり、その中の1時間半の割当で行うことなので仕方ない。

せっかく各団体が集まるのに、個別相談の時間が30分しかないのがもったいない気がする。この個別相談は具体的に予定が進んでいるようだが、やり方次第だと思う。他にいかがか。実際に活動している中で、夢田委員はいかがか。

(夢田委員)

このアンケート結果は市全体の話で個々の問題をどう汲み取っていくか考えると、今回のアンケートの中で0.7%の人が無回答でこの人達は何を求めているのか調べられてない。予算を有効に使うためにはもう少し突っ込んだアンケートを取る方がいいと思う。例えば町会の話が出たが町会に参加しない住民へ少し突っ込んだアンケートを取るとかしないと、本当に求めているものは分からないと思う。自分は今サロンを若干やっているが、周りの方や自身が何らかの当事者になってしまいそうなときに、その手前で何とか引っ張って戻そうというのが全体の総論だと思う。ではどうやってと言われたときには具体的な方法は分からないが今はそう感じる。

(委員長)

何か物事を始めるとか、特に課題に対処するためにはニーズアセスメントをどれだけきちんと取れるかが勝負になる。だからおっしゃることは全くそのとおりだと思う。先ほど地域包括支援センターの方々から報告いただいたように、色々なところから生の声でニーズを拾ってくれている。一方で、このような市全体のアンケートはあ

る意味傾向は見えるが、本当のところは分かりにくい。ただ、傾向を取っていかないと行政として政策形成ができないので、取らざるを得ない。こういうアンケートに無回答の方を対象にニーズが取れるアンケートができれば良いが、そういう方達にリーチするのが一番難しい。

(埴田委員)

ただ、その方たちを引っ張り込む又は意見を伺うなどしないと、本当の意味での問題点は見えないと思う。

(委員長)

本当に関心がない方や、無回答の方は、もしかすると個別対応になる可能性が高い。

(埴田委員)

そうだと思う。ただ、それすら分からないので少し手をかけてもいいと思う。そういったことをもう少し話せば一番いいと考える。

(委員長)

前回の話し合いを踏まえると、特に関心がない方や、ニーズが実はあるが、そうことに自身も気づいていない方や、若しくは絶対にそういう世話にはなりたくないという方は個別対応とし、むしろ幅広い方々の中で、少し背中を押せば地域に出て行ける又は活動しようと思うが、いま1歩踏み出せない方とか、情報がちゃんと届いていない方に対してどのように対応していくかを検討したほうが良いという意見が出た。なので今日は少し背中を押せば踏み出せる方へのアプローチについて話し合いを行う。

また、地域の中から本当に困っているが声を上げられていない方を見出すのは本当に難しいので、だからこそ日々地域包括支援センターの方は地域に出向いて、色々なニーズを聞き集めるためのネットワークで、他からニーズを発見できるように地域づくりを常に作っている。

(埴田委員)

その通りで包括だけではなく民生委員とのコミュニケーションや、連絡網を巻き込んで1つのマップができ上がる、このマップができればある程度の方向性が見える。これを活用すれば大きな問題が出る前に小さい芽のうちに潰せるので、そのほうが大事だと思う。

(委員長)

そこはとても重要だと思う。

(埴田委員)

難しいことだと思うが。

(委員長)

その中でも生活支援コーディネーターは環境整備をしていく役割になるので、思いはあるがもう少し背中を押してもらわないといけない、参加を躊躇している方へ、活動を継続していく方へ、若しくは活動的な方に対してどのような働きかけをする必要があるのか話し合いができればと思う。

鈴木(寛)委員、前回そういう意見を頂いたが。

(鈴木(寛)委員)

きっかけがあれば活動を躊躇している方に対しては色々な活動があつて、その1つとしておしゃべりサロンがある。主催者が知人を招待し笑いヨガとか三味線とかハーモニカをやりながらみんなで楽しく活動している。人気があるので比較的人が集まる団体で、開催場所は集会所で活動しており窓を開けているので、その横を通る方に

楽しそうなサロン活動の様子が見える。それを見て興味関心を寄せるのかもしれない。

活動団体がそういう楽しいイベントを周囲にPRすることもきっかけだと思う。あと自分は田んぼ活動もやっている。小さい子供連れの若い家族が田んぼ活動を見て興味を持ち、後日連絡してきて田んぼ活動に参加したいと申込んで来る。

だから活動のPRとして、周囲に見えるように活動することは良いことだと思う。一つの問題として、自治会は閉鎖的で周りから何をやっているか分からない。自分が自治会に入ったきっかけは引っ張り上げだが、毎回の勧誘で加入した。自治会へはどのようなきっかけで入ってくれるのか、自治会の活動を知ってほしいと思うのだが。昔は社協のバスを借りてどこか見学に行くイベントがあったが、そのバスがなくなりイベントもできない。何か楽しいイベントをと考えようと、餅つき大会の開催を提案すると、今の自治会を構成するメンバーが年寄りで面倒くさがり実現しないので悩んでいる。

(委員長)

その課題は自治会だけではない。色々な団体参加者の高齢化が進み、なかなか思うように活動ができないという悩みが共通する。

今日は自治会について話し合い、結局他の活動団体にも当てはまることだと思う。どうすれば参加しようと思う状況をつくれるかは鈴木(寛)委員がおっしゃった見える化がとても重要で、周りから見えて興味や関心を持てば向こうから声をかけてくる。自治会の活動としてよく見かけるのは消防の訓練やお祭りなどだが、他の活動はあまり分からない。

(千田委員)

自分が町会に入ったきっかけは、会社の仕事が終わったときに町内パトロールがあると聞いて、単に何かやらなければと思っていて。更に町会の班長は会社を辞めて時間が出来たのでやることにした。班長として会合に出たときに副会長が勝手に理事役の話を持ってきて、時間もあったので理事になった。

また、主な活動は清掃活動やお祭りだが、お祭りは町会と氏子会で分けて開催している。お祭りは子供会を主体に開催し、子供会に来ている子供のお父さん方にも活動してもらい、そのお父さん方を町会に何とか引き入れようと勧誘している。

町会の高齢化は避けられないので、高齢者はほとんど辞めてしまい次が自分の世代だった。でも、中にはお父さんの世代に町会に入っていた方の息子が引続き活動してくれる方もいることが多い。

また子供会に入るには親が町会に入っていないと入れない仕組みにしている。そうすることで町会に入る方が増えるが、それでもお祭りの段取作業に参加できる人数が減っていて、準備に時間がかかる事態になっている。これが極端になるとお祭りもできなくなると思う。まだ今のところは気力等で数年は続けていけると思うが、そういう危惧はある。

(委員長)

お祭りは1つの大きなきっかけで周りにもアピールが出来るし、子供が来るのがすごく大きい。そういう活動から徐々に広げていけるといいが、逆にそれが出来なくなってしまうと悪循環に入っていくと思う。

鈴木(寛)委員のところはお祭りはやるのか。

(鈴木(寛)委員)

お祭りは神明宮が前原町の氏神様で、一番近い天満宮は小金井神社だが、小金井神

社のお祭りがすごく目立つのに比べて神明宮は目立たない、しかも小金井神社から前原1丁目、2丁目が遠いので、お祭りを子供会と一緒に出店しようと、イベントの計画を提案するが、町会の役員達がなかなか乗ってこない。

(委員長)

子供が鍵で夜店や屋台が出ると喜ぶし、それに行きたいと言うと親はついてくる。また、それらの準備は色々あるために親に活動を担ってもらおうと、多少なりとも子供の親世代の方と一緒に活動ができる。

また自治会の活動が周りから見えるように、少しでも興味を持ってもらえるように、どれだけ発信していくかが鍵になることはどの活動も一緒だと思う。

(清水委員)

1つだけ伺うが、前原町の子供会はどのように成り立っているのか。子供会は誰が主催しているのか。

(鈴木(寛)委員)

前原町の子供会は2年ごとの交代制で、若くて優秀な女性の方が積極的に活動している。あの人たちが自治会に入ってくればすごくいいと思う。

(清水委員)

子供会を構成する親世代は若いし、スマホを日常的に使っているので、そう方が自治会役員にいないのかなと思った。

(鈴木(寛)委員)

なかなかいない。

(委員長)

少なくとも子供会に関連している方、若しくはその親が自治会に入っていない場合もあるということだが、子供会の活動と自治会の活動をできる限り連携することが自治会に入る方を増やす一番近道のような気がする。そういう町会のシステムにしたらいかがか。

(田部井委員)

個人的に町会に誘われたときに思ったのが、防災の活動で関わってもらえないかと具体的に誘われたので参加したことがあった。何か具体的な役割で誘ったほうが割と参加しやすいと思った。また、参加することでその活動の大切さを知るので、その辺は営業活動ではないが具体性を持って声をかけると割とヒットする。

(委員長)

今、言ったことは自治会に限らず、他の活動に参加する方たちに対しても当てはまる。ちゃんとニーズを把握できればいいが、だからこそ個別相談でその人の興味関心を知り、こういう役割を担っていただきたいと話をすることで、すぐに活動団体に入ろうという感じになるが、そのためにはその方を知るところから始めなければいけないので難しい。

ここまで1番を中心に話し合いをしたが、2番、3番について今日の段階で話したいことがあれば意見を頂きたい。今年度はこれまでの総括をしながら、この課題に対してより幅広く見ていき第3回でも継続して検討していく。他にも活動を継続するためにどうすればいいのか、若しくはどのように活動主体となる人を発掘・育成していけばいいのかについて意見があれば伺いたい。

(千田委員)

我々はシニアSOHO小金井という活動で、市の委託事業の中で地域参加講座を20年以上やっている。毎年ニーズがあるのか人は来る。少ないか多いかという問題は

あるが、講演会も主催の講座も続けていかなければいけないと思う。多少の世代交代があり、ただ問題は主体的に活動してくれる人が入ってくるかどうかは年によってすごく差がある。毎年何人かが加入する中で、その誰かに理事になってもらう方法をとっている。また最近の定年が70歳くらいで、70歳を過ぎても働いている人もいて、入会してくる方が70歳前後で、今の時代ではしょうがないと思う。健康寿命も延びているので70歳から80歳くらいまで活動してくれる年齢だという理解でNPO法人を運営している。だからこそ毎年新たな人に加入してもらえるように継続しなければならないと思う。

また、各包括の方がこれだけ地域のニーズをつかまえて活動しているので、そういう活動をもっとアピールしてもいいと思う。

(鈴木(幸) 委員)

一人一人に興味や興味関心を聞いて、それにあった活動が見つけられたら長く活動できると思う。

(委員長)

活動団体を続けるためには新しい方に入ってもらい、その後に引継ぎをしながら継続できる状態を作ることとはとても重要だと思う。また、包括の活動がまだ一般の方々に周知できていないと思うので、包括支援センターの生活支援コーディネーターはこういう活動ができているということを発信するとともに、こういう支援ができるというPRは必要だと思う。

こちらのニーズ調査で地域包括支援センターの認知度はどれくらいか。

(事務局)

50%以上の認知度はあると思う。

(委員長)

それは頑張っていると思う。現在の認知度も高いと思うが、生活支援コーディネーターの成果や色々活動していることをもっと発信してもいいと思う。そうすることでこれから活動をしたい方が、立ち上げ支援をしてほしいから包括に相談に行こうと考える方も出てくる可能性がある。他に何かあるか。

(田部井委員)

この活動に人が不足しているとか、こういう力が欲しいとか具体的に求めている役割を示してもらえると、その活動なら、この作業なら自分が出来ると考えてもらえると思う。

(委員長)

こんな人を募集していますということか。

(田部井委員)

そんな感じだ。

(委員長)

それでは募集欄や、募集広告を作ってはどうか。でも、その周知が難しいのか。

(鈴木(寛) 委員)

町会便りでしょっちゅう募集している、自治会役員募集と表示して。

(委員長)

自治会役員という募集の方法ではなく、具体的にこれに興味のある人とか、こんな役割を担ってくれる人のような表現はどうか。自治会役員と言われると、いきなり責任が重く感じて、やりたくないなと思う気がする。

(鈴木(寛) 委員)

了解した。

(委員長)

ぜひ試してほしい。

今日はかなり具体的なところも含めて検討すべきことについて話し合いができた。今年度については個々の地域課題について検討すべきことを中心に、より具体的に第3回でも話し合いをしていきたい。包括の方々は日頃からやっていることや、気をつけながらやっていること、逆に聞きたいこともあると思うので、もしあればその辺りを次回の第3回で上げていただきたい。それこそ活動している地域の方も多くいらっしゃるので、今日の話を踏まえ一緒に話し合いができればと思う。

それでは、これで終わりにしたい。

3 その他

事務局より次回協議体の開催予定の案内の説明を行う

4 閉会